Osaka University Knowledge Archive

Title	ル・コルビュジエから映画へ : 中井正一の機械美学のモデルについて
Author(s)	伊集院, 敬行
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 92-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53398
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ル・コルビュジエから映画へ
── 中井正一の機械美学のモデルについて ──

伊集院敬行／島根大学

1．中井正一にとってのLe Corbusierと映画

1930年代，中井正一（1900-1952）は，カッシーラー（1874-1945）やハイデガー（1889-1976）の影響のもと，映画をモデルにして，機械時代にふさわしい新しい主体と美学について考察し，カント（1724-1804）美学を乗り越えようとした。そのとき，中井が新しい機械時代の美学の構築のためにモデルにしたものが，ル・コルビュジエ（1887-1965）の機械美学とモンタージュ派のソヴィエト映画であった。このことから，我々は中井の美学においてル・コルビュジエの機械美学と映画のモンタージュは深く関連していると思うかもしれない。

確かに「機械美の構造」（1929）で中井はル・コルビュジエの機械美学やベラ・バラージュやヴェルトフの映画理論に言及しながら，写真や映画による機械的描写に機械美を認めている。しかし中井の論文に，モンタージュを機械美と関連づけながら論じたものはない。

中井が建築とモンタージュを同時に論じなかったことと対照的に，中井の後輩である清水光はその『映画と文化』（1941）の第一章「映画と機械」で，建築の力学的構造と映画のモンタージュに「構造」という共通点を認め，これを機械美として定義しようとした。

中井と清水のこれらの論考を比較すれば，中井は，映画の機械的描写に建築の機能美に通じるものを認めていたと言えるとしても，映画のモンタージュに機能美を認めていたとは言えないように思われる。では，中井の美学において建築と映画は，どのように関連しているのだろうか。

2．実体論・機能論・存在論のモデルとしての遠近法・Le Corbusier・モンタージュ

それを教えてくれるのが，「模写論の美学的関連」（1934）である。この論文で中井はまず，カッシーラーの「実体概念と機能概念」（1910）に基づき，カント的な実体論から機能論への移行を説き，そこからさらにハイデガーの存在論への移行を説く。

実体論では，対象は主体によって意識される実体としてあり，主体はそれを意識する主観としてある。そのため実体論では，主観と客観，内界と外界の連続は不可能性である。そこでカッシーラーは対象を実体ではなく，「機能」（関数）として捉えることで，主観と客観，内界と外界の対立を解体，解消しようとする。しかし，行き過ぎた機能主義や合理主義が人間性を失うように，機能としてのみ主体と対象の関係を捉えるなら，それは人間的方向性を失いかねない。

そこで中井はハイデガーの存在の思想に注目する。存在論は，対象が意識される以前からすでに主体と対象は関係していると考え，この関係の中で生じる対象や主体を「存在」とする。対象を実体として捉えず，主体と対象の関係を重視する点では存在論は関係論と同じである。しかし，機能論が主体と対象の対立の解消を試みるのに対し存在論は，この対立に先立つ存在を取り戻そうとする。

この論文で中井が辿るように，思想の基盤が，実体論から機能論，さらに存在論へと変化したのなら，実体論的な主観としての意識はもはや重要ではない。中井はこの意識の危機を，精神分析理論における無意識の重視と

して理解し，意識と無意識の対立を実体論と存在論と重ね，映画のモンタージュをそのモデルとした。つまり中井はモンタージュに無意識を暴露する機能を認め，これを我々（自我）が存在（エス）を取り戻すこととして理解したのである。

では，この「模写論の美学的関連」の考察に，中井が他の論文で，カント的実体論のモデルに遠近法を，カッシーラー的機能論のモデルにル・コルビュジエの機能主義建築を採用したことを合わせてみよう。すると，この論文で中井がカント，カッシーラー，ハイデガーおよび精神分析理論へと論を進めるとき，彼の念頭にあったものはそれぞれ，遠近法絵画，ル・コルビュジエの機能主義建築，映画のモンタージュということになる。したがって中井にとってル・コルビュジエと映画のモンタージュ関係は，機能論と存在論の関係と相似であり，清水が論じたようには関連していないのである。

３．モンタージュと自由連想法

中井は，非本来的な在り方の頽落していた現存在がその本来的な在り方を取り戻すというハイデガーの存在の哲学が目指すものを精神分析の理論に認めるとき，モンタージュを精神分析の実践と同じ効果を持つものとした。このように，中井の美学において精神分析の技法と理論は，映画のモンタージュと存在論を結び付ける重要な役割を果たしている。では，どのようにモンタージュは我々の無意識を開き，そこに「本当の自分」としてのエスを暴露するのだろうか。

「模写論の美学的関連」に先立つ「『春』のコンティニュイティー」（1931）で中井はすでに，モンタージュを精神分析の実践と比較している。この論文が論じる『春』は，M・カウフマン（1897-1980）の1929年の映画で，そこでは兄のヴェルトフの映画のように，短い記録映像が連続する。中井は，そのあまりにも短いショットはもはや描写ではなく，記号であると考えた。そして，ショットを「記号」として捉えることでモンタージュに，フロイトが論じる「内面的リアリズム」と「連想作用の中の特殊な法則性」があるとし，この「内面的リアリズム」に，キノキで捉えられた客観的性を超えるものを認めた。

では，中井がモンタージュについてこのように述べることを精神分析の技法に対応させてみよう。すると「連想作用の特殊な法則性」は「圧縮」や「置き換え」という夢のメカニスムに，「内面的リアリズム」は精神分析で明らかになる「抑圧された現実」や「心的現実」に対応する。つまり，ヴェルトフやカウフマンの映画が，自由連想で語られる夢であり，映画の各ショットは，フロイトが語と見なす夢の各イメージに相当する。だとすると，連想が躓く点で患者の無意識が露わになるように，ギクシャクした編集のつなぎ目にも抑圧された現実とエスが現れるということになる。

４．終 り に

中井は実体論を乗り越えるために，関係論としての機能論，そして存在論への移行を説き，それを説明するために，ル・コルビュジエの機能主義，精神分析の技法を取り上げ，映画のモンタージュの精神分析的理解を試みた。これはル・コルビュジエ自身の歩みでもある。というのもル・コルビュジエも，機能主義的建築の最高傑作とされる「サヴォア邸」の直後の「スイス学生館」から，ブルータリスムと呼ばれるシュルレアリスム的傾向を強めていくからである。